

Title	日本史學史(清原貞雄著, 中文館發行)
Sub Title	
Author	山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.3 (1928. 11) ,p.141(453)- 144(456)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

日本史學史（清原真雄著）

本書は徳川時代までの吾が國の史學發達の沿革を叙せるもので、本邦歴史編纂上の業績に就き、及び既に編纂されたる歴史書の講述に就き、及び各時代の歴史觀の變遷等に就て、此が跡を考察したるものであつて、いはゆる本邦文化史の一部を構成すべきものである。今日吾が國に於て適當なる歴史書の解説書の少ないものである。時に方つて、本書の如き、實に意義ある、且つ絶好の試みと言ふべきである。

本書は第一章に於ては、朝廷の國史編纂と題して、先づ日本書記以前の國史編纂事業、及び古事記編纂に就き述べ、その編纂動機を以つて、史記、漢書、後漢書等の支那の紀傳體の歴史傳來の刺戟を受けて、それに倣つたものであるとし、次に日本書紀編纂に至るまでの朝廷に於ける國史編纂事業が度々中止したにも拘らず、大體繼續されて養老四年に至つて始めて成れるものであるとなし、次に六國史の成立に就き述べ、延喜元年三代實錄成立後朝廷の國史編纂は中止になつたのであるが、その實その時限り一時に國史編纂事業が中止になつたものでなく、その後新國史一名續三代實錄の成立のあつた由を述べてゐる。然しこの新國史は名前

だけ傳つてゐて、實物は今日一冊も残つてゐない。それから次に平安朝時代に於て初まる日本書記講義の起れる理由に就き述べて、平安朝時代に入つて唐風模倣の風を脱して、國風發揮の精神勃興せることに歸してゐる。それから國史編纂の中止と同時に、書記の講義も自から見えなくなつてゐると言つてゐるから、其處に當然何等かの關係があらうと信ずる。

第二章に於ては平安朝時代の私撰の歴史と題して、先づ朝廷の經濟衰へて、朝廷の歴史編纂が中絶するに及んで現れたる個人の國史の補遺と、其の抄錄に就て述べ、齊部廣成の古語拾遺、日本紀略及び本朝世紀等に就いて解説してゐる。次でこれと同時に現れたる平安朝時代の偽撰の歴史に就て述べて、この種の中でも有名なる舊事本紀、若しくは先代舊事本紀に就て説明してゐる。斯の如き偽書が出てたといふことは時代思想と關連して見る時大いに興味がある。次で國史とは別個の意味を有する平安朝時代の獨特の私撰の歴史たる物語及び鏡類に就て述べて、先づ最も著明なる榮華物語、大鏡、今鏡、水鏡、增鏡等に就て比較相對照して各其の特色を説明すると共に、此等の史書に現れたる時代精神、即ち平安朝末期から鎌倉時代にかけて公卿社會に現れたる悲觀厭世思想、及び佛教末世思想に就て考察してゐる。次にこの平安朝末に現れたる一種の主義宣傳を目的とした歴史書に就て述べ、扶桑略記を始めとして、靈異記、法華驗記、其の他淨土信仰から生れたる往生要集等を擧げてゐる。此事は實に吾が國に於ける佛教信仰の歴史を知る上に貴重なる材料であるが、勿論歴史的價値に乏しいものである。次に平安朝時代に成れる個人の傳記に就て

述べ、最も著名なる聖德太子傳、其の他藤原家傳、田村麻呂傳、和氣清麻呂傳、菅原御傳記等を擧げてゐる。

第三章に於ては、鎌倉時代に入り、先づ史學理論としての愚管抄に就て詳細に説明してゐる。本書の序にも歴史的事実の哲學的解釋といふやうな思想史上の問題に就ては特に詳細に叙述する事にしたと言つてゐる通り、本書の解説は恐らく最も興味ある箇所と余は信ずる。今それを一々紹介するを得ないが、兎に角時代思想の背景より見て、史觀及び史論の變遷推移の跡を検することは、最も興味のあることであり、又史學には極めて大切なことである。蓋し史論及び史觀といふもの何時でもは時代精神を基調としてゐるものである。且つ個人の思想傾向を反映するが故に、時に依つては政治を重く見たり、或は宗教を重視したり、或は經濟を重く見たりするものは或る程度まで止むを得ないことである。この意味に於て愚管抄の著者は明かに王法よりも佛法を重視してゐるのであつて、これ實に鎌倉時代の佛教末法思想を背景とし、且つ著者慈圓の佛教家としての立場を顧慮して初めて納得し得るのである。慈圓は鎌倉幕府の出現を是認したる點に於て彼は最初の公武合體論者のやうに信する。次に大體史料的產物の乏しい鎌倉時代に於て最も傑出せるものとして公家側の百鍊抄武家側の吾妻鏡を押してゐる。次に鎌倉時代以後神道說勃興の機運と相俟つて、日本書紀神代卷の研究が特に目立つやうになつた事を記して、その代表的なものに就て解説してゐる。それから鎌倉時代末に至つて、始めて從來の如き政治的出來事のみを記した歴史書以外に國民文化の一部、特に佛教を對象とした歴史書即ち文化史と名づくる學問の勃興に伴つて國史研究の機運も比較的早くより萌芽し

べきものが現れたことを注意してゐる。そして元亨釋書を以つて其の代表作として説明してゐる。

第四章に於ては南北朝足利時代に入つて、著しく文教が衰へた結果、歴史に關する研究も著述も振はなくなつたが、北畠親房の神皇正統記を以つて特筆すべきものとして、例に依つて詳細に述べてゐる。親房が神皇正統記を草するに方つて、全然参考書を有しなかつたわけなく、その唯一の参考書であつたといふ年代記なるものは或は愚管抄の第一卷第二卷になつてゐる皇帝年代記の事でなからうかと言つて、神皇正統記と愚管抄の議論と甚だよく符合する點に就き、前者が後者に大に負ふ所あることを述べてゐる。唯だこの兩著に於て目に立つ點は、愚管抄には佛教思想が強く現れてゐるに反して、神皇正統記には佛教思想よりも、支那の政治道德の思想が甚だ強く現れてゐると思ふ。従つて前者の歴史推移論には甚だ悲觀的に傾いてゐるに反して、後者のそれは大いに現在の悲境に比べて、將來を樂觀してゐる傾向がある。此れ即ち兩者の思想の相違に因るものと信する。次に此の時代の著名なるものとしては太平記を擧げ、且つ最近の學界の太平記に對する態度の大いに變つて來たことを述べ、史料として價値の少くないことを述べ、更に此の時代の歴史書として價値の大いなる吉野拾遺物語、及び梅松論に就て解説してゐる。

第五章に於ては徳川時代に入つて、先づ徳川時代初期の文教復興の概説をなし、此の學問復興の機運を以つて、戰國時代末の五山僧の朱子學に萌芽すると述べてゐる。そしてこの儒教中心とする學問の勃興に伴つて國史研究の機運も比較的早くより萌芽し

たが、殊に家康の學問獎勵に負ふ所多いことを述べ、幕府の古書の蒐輯、書寫出版等に依つて大いにこの機運が助けられて、先づ林羅山の本朝通鑑の編纂は實に絶えて久しき國史編纂を再興せるものとして、此が編纂より出版までの經過と此の書の内容特色に就て概説してゐる。次に大日本史編纂の経過に就て概説して、その史料蒐集の辛苦を述べ、光圀の修史事業が全然自發的であると言つてゐる。兎に角光圀の修史事業は、普通の殿様藝でなく、その精神と目的とに於て實に立派である。それから此等の官邊の修史事業に次で私撰の歴史に就て述べたる後、本邦近世史學史上最も重要な地歩を占むる新井白石の貢献に就て記し、白石の三大著たる讀史餘論、落翰譜、古史通に就て解説して、特に讀史餘論及び古史通に依つて白石の史家として本領たる総合的推理力と、考證分析の手腕とを賞してゐる。著者は讀史餘論の組み立て方には、前の愚管抄や神皇正統記に幾分負ふ所があるだらうと言つてゐるが、然し神皇正統記の場合と異つて、白石の史論とは獨創的見解が大部分を占めてゐると辯明してゐる。兎に角讀史餘論は前二著に比する時は政治的觀察力が非常に強く現れてゐることは明かで、これは著者の言の通り時勢の罪とその進講の目的とに因ることであらうが、同時に著者の政治家の本領の影響にも因ると信ずる。要するに白石の綜合的手腕は彼の政治家の本領と切り離しづらい關係にあるのであつて、これ即ち歴史を資治とする時代精神を背景として立つてゐるが故である。これに反して古史通は白石の言語學的批判考證の才能を示したものであつて、此に依つて從來よりも更に廣大なる學術的分野を拓くが古代史研究の上に開拓し

たのである。かくて白石のみ研究を公にした時代即ち元祿時代から吾が上代研究の新氣運が起つて來たのであるが、それは必ずしも白石一人に導かれたるものではなく、白石以外の多くの古代研究家即ち復古國學者の貢献に因ることを述べてゐる。要するに元祿時代の吾が古代史研究の新機運は、白石のみならず、復古國學者も古代語の研究に導かれたものであつて、萬葉集の研究にその萌芽を發したのである。即ち下河邊長流僧契沖等の歌集としての萬葉集の研究より、荷田春滿、賀茂真淵を経て、本居宣長の歴史書としての古事記の研究に至つて吾が古代研究の機運が一轉したのである。従つて本居宣長の吾が古代史研究に於ける貢献は更に大といはねばならぬ。著者は宣長を以つて歴史家たるよりも寧ろ思想家として取扱つてゐるらしいが、彼は正に吾が古代文明史家である。

次で古事記研究と同時に日本書紀新研究に貢献したる人々の著書に就て概説して、殊に著明なる稟威道別の著者たる橋守部の日本書紀研究史上に於ける重要な地位に就き説明してゐる。兎に角日本書紀の研究に於ても中世の註釋家の佛教及び儒教説の牽強附會より脱して、大いに學術的になつたことは注意すべきである。斯の如く徳川時代末期に於ける考證史學發達の機運に伴つて、史料編纂及び蒐集の事業も又大いに進歩したのは當然の事で、次に從來の單なる歴史的編纂物より更に一步進める一層純粹なる意味に於ける史料編纂事業に就て概説してゐる、それから最後に我が國近世史學發達の基調たる考證史學に貢献したる人々に就て述べ、伴信友に依つて我國考證史學發達に一時代を劃したと言つて

ゐる。

以上は本書に關する極めて大略の紹介であるが、兎に角本書の特色は其の歴史的事實の思想史的方面の説明には努めて文明史家的の觀察をしてゐることであつて、此の點に於て興味を有すると共に、至極適切なる國史書の解説書であると信ずる。本書は徳川時代を以つて終つてゐるが、恐らく著者は更に明治以後の史學發達に就ても、今後公にされる事と思ふが、その完成を祈り合せてその上梓の日を待つ。(山本光郎)

人類起源論(清野博士著、金闢文夫共著者)

こうして見るとまだ學術に對する社會常識向上的餘地が多いことを遺憾に考へる。

本書は大體四篇に分かれ、第一篇を緒論とし、人類起源論の人類學上に於ける位置、人類起源論の歴史的回顧を述べ第二篇人類起源總論として、人類が動物より由來せる證據に就て、解剖學的、生理學的、病理學的證左を論じ、第三篇で人類起源系統論として、靈長類の系列と其の由來、古生人類、人類の系統に亘つて説き、第四篇で人類化成論と題し、人類化成の時、處、及び原因、人類化成の經過に亘つて終つて居る。而して立派で氣持ちよき圖版が十九と挿圖が一〇七もあるから四五〇頁に及ぶ本書としても、圖に饒ることはない。

本書を評論するに當つて、第一に見ねばならぬ所は、本書が共著であり、且つ其敘論に述べられて居る如く、清野博士は單に參加せられたのみで、主體は金闢氏の述作であることである。これは一般に共著の通有性として著しく個性を抹殺せらるゝことで、本書に於ても、清野博士一流の豪快味に乏しく、從つて本書から著者として責任の一部を負はれる博士を見るとは、博士を誤る恐れが大である。博士としては金闢氏に對する美しい友情の發露とも見らるゝが、吾れ等史前研究の學徒として重要視して居る本書の如き研究は、博士が責を負はるゝならば、負はるゝらしく、充分な個性發揮があつて欲しく思ふ。又吾れ等として金闢氏に何等の不足を感じない。雙方共に不利益のことゝ思うて居る。たゞ博士の盛名を本書に加ふ可く餘儀なくせしめたと思はるゝ出版事情の内容は知らないが、引いては讀者にも責任あることゝ思ふ。

これが内容に於ては、どんな書物でも有る如く、あらを探つたら、ありとするであらうが、邦文としては、こうした方面的の書物が皆無に近き有り様である以上、重要な一参考書である。而して私共は、清野、金闢兩氏などとは、同じく史前の研究をなす學徒ではあるが、研究の立場は、大に異なるものがある、兩氏は主として、所謂人類學と云はるゝ方面より見て居らるゝに對し、私共は史前學なる立場にあるから、本書に於ても、私共としての立場から見れば、色々と註文の出るのも止むを得ざることゝ思ふ。特に靈長類の由來等に於て、今少し地史學的方面を明にして欲しい、獨り吾れ文化を取扱つて居るものに限らず、其自然環境が動植物の成敗に大なる關係あることゝ信ずる。從つてこの自然環境の狀態、特に問題となつて居る第三紀の如き、どんな自然環境であつたかの復原が、讀者をして起源論の核心に觸れしめ得ること